えねなび

編集発行：ひた市民環境会議エネルギー部会
事 務 局：日田市水郷ひたづくり推進課内
(TEL)22-8357 ／(FAX)22-8241

vol.9　　特集「《六ヶ所村ラプソディー》上映会」　　２００８年6月1日　発行

コンセントの向こう側を描いた映画「六ヶ所村ラプソディー」

３月１５日（土）の午後７時から日田市文化センターにて、ひた市民環境会議エネルギー部会の主催により、長編ドキュメンタリー映画「六ヶ所村ラプソディー」の上映会が開催されました。現在の私たちの便利な暮らしは、大量の電力を消費することによって支えられています。その裏側ではどのような事態が進行しているのかを知ることによって、エネルギーを際限なく使っている今の生活のあり方を見直すきっかけにしてもらえればと、この上映会を企画しました。当日は 100 人ほどの方々に映画を観賞していただくことができ、「知らなかった」「深く考えさせられる映画だった」「もっと多くの人に見てほしかった」等の感想をいただきました。暖房を頼まなかったため上映中は寒い思いをさせてしまい大変申し訳なかったのですが、見に来ていただいた皆様には心より感謝申し上げます。

現在、日本で使われる電気の約１／３は、原子力発電によってつくられています。最近では発電時にＣＯ2 を出さないクリーンなエネルギーと宣伝されている原発ですが、100 万ｋｗ級の原発が１年間稼働すると、広島に投下された原爆の 1000 発分もの放射能（死の灰）がたまってしまいます。放射能（正確に言うと「放射性物質」）は、癌や白血病など様々な健康障害を引き起こすのですから、ＣＯ2 に負けず劣らずの厄介者です。これがどんどん原発の敷地内に蓄積されており、このまま進めば近い将来原発は稼働できなくなってしまいます。これら全国の原発から出る使用済み核燃料を当面引き受ける役割を負わされることになったのが、青森県の六ヶ所村なのです。この映画は、使用済み核燃料を化学処理してプルトニウムを抽出する再処理工場が建設された六ヶ所村にカメラを据え、そこで暮らす反対、賛成、それぞれの立場の人々の思いや行動を追うことで、日本のエネルギー政策の最前線となった現場のありのままの姿を伝えるともに、電気を使っている私たち全員がこの状況に責任があり当事者であることを訴えています。

映画が伝える再処理工場の問題点

この映画では、私たちが知っておくべきいくつかの重要な事実が語られています。

まず、再処理工場で取り出されるプルトニウム自体が、わずか 100 万分の 1 グラムを吸い込んだだけで死に至るという、大変な猛毒を持つ危険な物質であるということです。

原爆の材料でもあるプルトニウムは、元々は高速増殖炉という新しいタイプの原子炉で使われるはずの燃料だったのですが、世界中のほとんどの国は技術上の困難性から高速増殖炉の開発を断念しており、日本でも 1995 年の原型炉「もんじゅ」の事故以来、事実上開発はストップしたまま実用化の目途は立っていません。既存の原発で使う「プルサーマル計画」も様々な問題を抱えて遅々として進んでおらず、プルトニウムを生産しても使い道はほとんどないというのが現状です。日本はこれまで海外に再処理を委託するなどして、この使うあてのないプルトニウムをすでに 43 トンも保有しているのです。六ヶ所村の再処理工場が本格稼働を始めれば、年間 800 トンの使用済み核燃料を処理して 8 トンのプルトニウムが取り出される計画です。長崎型原爆にして 1000 発分に相当する量のプルトニウムがこれから毎年増えていくことになるのです。

商業用の再処理工場があるのは日本のほかにはイギリスとフランスがあるだけで、ほかの原発保有国は技術的にも経済的にも問題の多い再処理ではなくワンススルー（核燃料の使い捨て）という方式を採用しています。採算を度外視して再処理工場を何が何でも動かそうとしている非核保有国は日本だけです。これでは諸外国から核兵器の保有を意図しているのではと疑われても仕方がありません。

その上、再処理工場は桁違いの量の放射能を撒き散らします。工場が公表している数字によると、原発の 200 から 300 倍に相当する放射性物質が毎日放出されます。俗に「１日で原発の出す１年分の放射能を海と空に垂れ流す」と言われますが、決して大げさな表現ではないのです。推進側はそれでも「大量の大気と海水で希釈されるから問題はない」と言います。しかし、イギリスのセラフィールド再処理工場があるアイリッシュ海は今や世界で最も放射能汚染が進んだ海となっており、沿岸の海水は放射性物質の濃度が通常の 70 倍にもなっています。そして、健康調査の結果、セラフィールドの近隣では、小児白血病の発症率が通常の 10 倍になっていることがわかっています。再処理工場が本格稼働すれば、日本でも同様の被害が発生する恐れがあると考えるべきではないでしょうか。

大分県初！　ＰＶグリーン電力証書で太陽光発電による上映会

私たちエネルギー部会も含めて多くの環境ＮＧＯの願いは「地球温暖化も原発もない２１世紀」です。そこで、今回の上映会は、ＣＯ2 も放射能も出さないクリーンな太陽光発電で必要な電力を賄おうと考えました。

太陽光、風力、バイオマスなどで発電された環境にやさしい電力のことを今日では「グリーン電力」と呼んでいます。これらの電力の環境価値を金銭化して証書という形で売買する仕組みが「グリーン電力証書」です。これを

購入することによって、たとえば工場の年間の使用電力の何割かをグリーン化する、あるいはイベントや放送で使用する電力をグリーン化する、といったことが可能になります。電気の種類を選べるようになるのです。こうして、太陽光発電を使ったチャリティ・コンサートやら、風力発電で動く電車やら、いろいろなものが登場してきています。

今回私たちは、全国で太陽光発電装置（ＰＶ）を自宅に設置した人々がつくっているＮＰＯ法人太陽光発電所ネットワーク（ＰＶ－Net）から、上映会での使用電力量に相当する分のＰＶグリーン電力証書を購入し、上映会場に掲示しました。実際には会場である日田市文化センターの電気を使用したのですが、その使用料とは別にお金を払ってＰＶグリーン電力証書を買うことで太陽光発電の電気を使用したものとみなされ、ＣＯ2 も放射能も排出しなかったと公式に認められるのです。ＰＶグリーン電力証書を使ったイベントの実施は、日田市はもちろん大分県でも初めての試みでした。

ＰＶ－Net は各県レベルで地域交流会という組織がありますが、大分県地域交流会の代表が本会メンバーである木村紘一さんだったことから、この企画がすんなりと実現しました。証書の購入代金はＮＰＯ法人の活動費用にあてられるほか、一部は大分県内で太陽光発電に取り組んでいる会員の収入として地元に還元され、グリーン電力の地産地消が実現しました。私たちは県内の太陽光の電力を分けてもらうとともに、採算的には厳しいとされる太陽光発電を実践している人たちを、ごくわずかですが経済的にサポートすることができたのです。

自宅に太陽光発電を設置するにはかなりの金額が必要ですが、数千円か数万円を払ってグリーン電力証書を購入することで、ある一定期間太陽光発電の電気を使っていると言えるし、その普及促進に貢献することもできます。今の日本にはそういう制度もできているんだということを、この上映会を機会に知ってもらえればと思います。

「六ヶ所村ラプソディー」を見て下さった方に感想を寄せていただきましたのでご紹介いたします。

これだけの情報社会で生活していながら、六ヶ所村という名前は何となく知っている程度で、そこに核燃料再処理工場が作られもう操業しているということは全く知りませんでした。今回私は中学生の二人の娘とこの映画を見ましたが、感想を聞くと、何となくわかったような気がするけど結局むずかしくて…と、はっきりしない言葉でした。親として伝えることは、どう言葉にして表現すればいいのか…。私なりに、外国で人体・自然に悪影響がありやめようとしていること、六ヶ所村に工場を作り日本で始めようとしているけど、どんな被害が人間と自然に出るかわからないんだよ！　ぐらいしか言えませんでした。「ロッカショ」の本を読み、子供にちゃんと伝えたいと思っています。本の中でも書かれていますが、再処理工場のことを知らない人が多すぎると思います。もっといろんな人に、特

に子供たちに知ってもらいたいです。
　私たちにできることは、原子力発電に頼らずに生活することだと思います。一人一人が省エネを心掛けることだと思います。思うだけでなく実行していきます。（４０代、女性）

　自分も含めて一人一人が電力を使っている以上、身につまされる思いだった。現地の人たちの責任ではない。そこに住んでいる人たちにとっては、イヤなものでも廃止とは言えないというのも現実だろう。火力や自然エネルギーなど、原子力以外のものに早くシフトしていくべきだ。もっと多くの人がこの映画を見て六ヶ所村のことを知らなければいけないと思った。（４０代、男性）

　うちも有機農業で米や野菜をつくっているので、映画に出てくる農家の女性の気持ちはよくわかる。私も自分でそうしないと気がすまないから、そうやっている。自分の米を買ってくれていた人に手紙で本当のことを知らせたら離れていってしまったという場面などは見ていてとてもつらかった。
　世界中でまた原発をつくろうという流れになっているけど、子供たちの時代はどうなるのだろう。またチェルノブイリのような大惨事が起きないと人類は目覚めないのだろうか。（５０代、女性）

　先進国はこれまでに色んな公害を垂れ流しては人々に大きな苦痛を与えてきた。豊かな生活優先社会の裏には徐々に積み重なった負の部分の蓄積があり、それは今、地球規模に広がる温暖化と異常気象となり、これは大きな国際的憂慮になっている。日本政府がこの問題に対して出したひとつの結論が、この核の再処理工場の稼働なのだろう。
　しかし、国民に広く知らされない中でのこの大きなプロジェクトこそ、過去何度も過ちを犯しては人々に大きな苦痛を与えた「垂れ流し」に他ならないのではないか。通常原発が出す１年分の放射能を、わずか１日で出すという。危険きわまりない核施設に絶対に安全と言える言葉はなく、本当に恐ろしいのは真実を国民や地元民に知らせずに進行していく国家の力だ。
　私は昨年、この六ヶ所村を含む下北半島を久しぶりにバイクで走った。驚いたのはずっと以前に比べて、この一帯の大半の道路や施設、一般家屋の多くが真新しく生まれ変わっていたことだ。これも国家の力なのだろうか…。それだけに大きな不安が残る。（５０代、男性）

「パトリア日田」の見学会（予告）

　今年９月にエネルギー部会の主催により、パトリア日田（日田市民文化会館）の見学会を予定しています。
　この施設は環境都市・日田にふさわしく、大規模な太陽光発電装置や屋上緑化などのエコロジカルな技術を導入しています。詳しい日程等が決まりましたら広報ひた等でお知らせしたいと思います。